

会員の方々のお庭を拝見しました

庭園文化研究分科会 原 裕二

1. 今年度の活動状況

今年度は個人の庭を視察したいと考え、会員の皆様に「お庭を拝見させてください」と募集したところ、多くの方々からよいお返事をいただきました。

お忙しい中、御家族ともども御協力していただき、大変お世話になりました。おかげで庭の由来や歴史的背景に至るまで貴重なお話を伺い、有意義な時間となりました。ありがとうございました。

以下に、その結果を報告します。

2. 拝見した庭の概要

見せていただいた庭をその作庭年代や地理的条件から分類すると、次のようになる。

表-1 視察した庭の概要

| 番号 | 出雲流庭園との関係 | 場 所 | 作 庭 年 代 |
|-------|------------------------|--------|------------------|
| (1) | 分布域の東部 | 松江市八雲町 | 大正初期→昭和に一部改修 |
| (2)-1 | 分布域の中央部 (出雲流庭園発祥の地) | 出雲平野西部 | 江戸中期→昭和後期に改修 |
| (2)-2 | | 出雲市斐川町 | 明治中期に移転→昭和(戦後)改修 |
| (2)-3 | | 出雲市斐川町 | 昭和初期→昭和後半に改修 |
| (2)-4 | | 出雲市斐川町 | 昭和初期に移住→平成初期に作庭 |
| (3) | 出雲流庭園より古い庭 | 島根半島南側 | 不明? |

このうち作庭年代は、聞き取り調査の結果に一部は筆者の推定を交えて記載した。

お屋敷の年代はもっと古いのであるが、当時の庭がそのまま残っているのではなく、昭和以降に手を加えられ改修されている場合が多い。

それぞれの庭の特徴について述べる。

3. それぞれの庭園の特徴

(1) 出雲流庭園分布域東部の庭(松江市八雲町)

お屋敷自体はもっと時代がさかのぼるが、庭は大正の初期に造られ、その後、庭石等に手が加えられた。

中門から入ると大きなヒヨクヒバが目に入り、黒松やイチイの木が見事である。

庭石の多くは近くから調達されたと伺っている。花崗岩が主体であり、八雲町の北側に広く分布するひよどり花崗岩と思われる。小型の庭石や飛石は八雲町南側で見られる波多層デイサイト凝灰岩が多い。



写真-1 庭の全景
庭石は花崗岩や凝灰岩。

その中で、あまり見かけない岩石が点在するのに気づいた。一見、砂岩に見えるが、部分的に結晶質で光沢があり、赤い色を呈する。

お話を伺う中で、昔は近くに鉱山があり、その石が混じっている可能性を示唆された。

八雲町周辺には宝満山を始め、いくつかの鉱山があるが、最も岩質に近いのは豊生鉱山であろう。

豊生鉱山は、八雲町鳥屋郷(秋吉)の桑並川上流にあり、1887年頃発見された。当初は磁鉄鉱を採掘していたが、1935年頃から硫安材料として黄鉄鉱を稼行し1954年休山した。鳥屋郷変成岩中に下久野花崗岩が貫入した接触交代鉱床(スカルン)である(鹿野ほか, 1991)。

花崗岩を基調として、近隣で産出する岩石をうまく取り入れた石組みである。



写真-2 赤っぽい庭石
鳥屋郷変成岩と思われる。

(2)-1 出雲流庭園分布域中央部の庭(出雲平野西部)

もともとは旧平田市付近を拠点として交易や商業活動で活躍されていた。室町時代から江戸中期にかけては、出雲大社や鱒淵寺領を除く出雲郡の東側を出東(しゅつとう)郡と呼んでいた(石塚, 2004, 美多, 1966)。その時代と思われる。

現在の出雲平野西部に移られたのは、1700年頃と伺った。

1635年の斐伊川東流後、出雲平野西部には浜山砂丘や園の海岸砂丘の周辺に、非常に水はけの悪い湿地が残された。自然条件が悪い中で農業を営むには、高度な技術と多くの労働力が必要であり、開拓に当たっては強力なリーダーシップが求められた。

17世紀後半から18世紀にかけては、壇土手の築堤(朝日丹波)、菱根新田の開拓(三木与兵衛)、妙見山への植林(秦重成)、園村沢の干拓(秦喜兵衛)、差海川の開削(間島作庵・藤崎五右衛門)、荒木浜の開拓(間庭左平太・大梶七兵衛)、高瀬川の普請(大梶七兵衛)、古志・知井宮の開拓(岸崎左久次時照之・山本仁兵衛)、浜山の植林(井上恵助)など、公共事業の分野で地域の発展に寄与した人物は数多い(石塚, 2004)。

当時、そのような高い技術を持った人々が大勢集まってきたと想像できる。

庭はその頃からあるが、昭和40年頃に改修され、現在のようになった。

門から中門に至るルートが整理され、中門外からの額縁効果が強調されている。春日灯ろう、雪見灯ろう、つくばい、短冊石がお手本のように配置され、緑色片岩の飛石やソテツなどの庭木がよいアクセントとなっている。



写真-3 中門 左手に島石(大根島玄武岩)の灯ろうが見える。



写真-4 典型的な出雲流庭園
枯山水、回遊式



写真-5 緑色片岩の飛石、
花崗閃緑岩の短冊石、うす

(2)-2 出雲流庭園分布域中央部の庭(出雲市斐川町)

もともとは今よりも南に屋敷があったが、明治中期に現在地に移られた。それ以前にも新川開削(1831~1832)に伴って移転した可能性がある。

庭はその頃からあったが、太平洋戦争末期に大きな影響を被った。

斐川町出西地区には戦争末期 1945 年 5 月に山陰海軍航空隊の新川基地(大社基地)が建設され、7月28日に玉湯町の基地ともども空襲を受けたことはよく知られている。

一方で直江基地と呼ばれる秘匿基地が7月末から建設を始めていたことはあまり知られていない。実際には現在のJR山陰線の東側から斐川支所の間に飛行場を計画したものであり、機密情報であるため当時は「牧場建設」と呼んでいた。

「赤とんぼ」と呼ばれる練習機を特攻用に使う目的だったが、あまりに急を要したせいで、新川基地のように格納場所を確保することができず、周辺の一般民家や神社の庭を利用しようとした。

その際、それに伴って庭木や庭石がかなり破壊されたと聞いている(池橋, 2004, 陰山, 1996, 槇原ほか, 2012)。戦後、時間をかけて現在のように整備された。

(2)-1 と同様、典型的な出雲流庭園であり、発祥の地にふさわしい庭である。中門からの額縁効果が見事である。

立ち灯ろうと雪見灯ろうは来待石、庭石や飛石は花崗岩を基調としている。

出雲流庭園でしばしば見られるように、庭石や陰陽石に島根半島海岸部の泥岩、砂岩(牛切層)、流紋岩(成相寺層)がアクセントとして用いられている。

北西に荒神さん、北東に竹林があって、代表的な屋敷構えを示す。

写真-6 典型的な出雲流庭園
枯山水、回遊式





写真-8 陰陽石

左が砂岩、右が泥岩。島根半島海岸部でよく見られる。

写真-7 中門からの額縁効果

(2)-3 出雲流庭園分布域中央部の庭(出雲市斐川町)

テレビや新聞で以前紹介されたこのお屋敷には、昭和2年作成の家相図が存在する。

平面図に風水を基とした方角や宅相が書き込まれ、間取りやかまどの位置を決めた様子がわかる。

庭の平面図は書かれていないが、当時は今よりもやや小さな庭が造られており、築地松で囲まれていた。昭和40年頃の圃場整備事業に伴って改修し、いろいろと手を加えながら現在に至っている。

庭石や灯ろうの配置は(2)-1や(2)-2と同じで、やはり北西に荒神さん、北東に竹林がある。

それに加えてここでは、屋敷を取り巻く築地松や生け垣の構造を見ることができる。

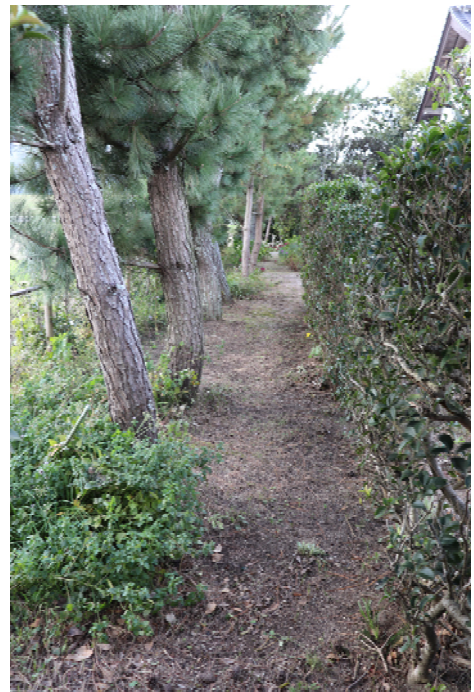


写真-10 屋敷を取り巻く築地松と生け垣(さざんか)



写真-9 典型的な出雲流庭園

(2)-4 出雲流庭園分布域中央部の庭(出雲市斐川町)

お屋敷はもともと平田の灘分町島村にあった。

昭和初期の斐伊川改修事業に伴って移転されたと伺った。この改修事業の経緯については灘分郷土誌編集委員会(1991)が詳しい。

多くの村民が同じ灘分町や宍道湖西岸の出東村・荘原村に移住したが、敢えてこちらを選択されたことは英断であったと思われる。

この付近は斐川町出西地区に建設された山陰海軍航空隊の新川基地(大社基地)に近い上、直江駅から新川基地まで敷設された鉄道のルートに近接している。基地建設に当たっては、出雲地域の住民は土木作業や宿泊所、食料や資材の調達などに動員され、直接・間接的に大きな影響を受けた(池橋, 2004, 陰山, 1996, 槇原ほか, 2012)。

庭は当初からあったが、現在のものは平成になってから造られた。

この庭の主眼は、何といても立派な庭石である。知人のついでで台湾産の庭石を入手されたと聞いている。

日本地質学会ホームページによると、台湾東部には古生代末期から中生代の Tananao metamorphic complex(付加体堆積物)が分布する。おそらくそのうちの黒色片岩かと思われる。ダイナミックな片理・褶曲構造が美しい。

灯ろうや杵脱ぎ石、一部の庭石には、花崗岩や緑色片岩が使われている。

部分的には現代風にアレンジされているが、このように伝統的な出雲流庭園の様式が脈々と受け継がれているのは大変喜ばしい。



写真-11 力強いイメージの石組み



写真-12 台湾産の黒色片岩
片理がはっきりしていて美しい。

(3) 出雲流庭園より古い庭(島根半島南側)

出雲市国富町の旅伏山の山裾には、要石が祀られている。

八束水臣津野命(やつかみずおみずぬのみこと)が国引きを行った際、土地が動揺しないよう、ここに石を「さし立給え」とあり、ゆえに村名を「国留」としたらしい。

要石は民家の敷地にあり、神職を招いて毎年8月25日にお祭りをされている。

御当主が祭りの朝に猪目の海岸に出向き、小石を拾い潮汲みをして要石に供えられる。この石を持ち帰って家で祀れば、地震や地すべりの際に被害が軽減されると言われて

いる。安政南海地震(1854)や浜田地震(1872), 昭和南海地震(1946)でも、出雲平野の平地部で家屋の倒壊や砂の液状化、地盤沈下が顕著だったが、この周辺ではさほどの被害がなかったと言われている。

平田は鎌倉時代の文書に「平田保」として出てくる(石塚, 2004)。木綿街道振興会ホームページによると、もともと近江商人によって開拓され、戦国から江戸時代初期に平田屋佐渡守によって町割り(都市計画)がなされた。(2)-1との関連が興味深い。

ご先祖は広島県吉舎町(現在の三次市)から少なくとも室町時代以前に現在地に移られた。

このお宅の庭には、1組の陰陽石と灯ろうがあるだけで、大きな庭石や灯ろう、飛石などの石造物がほとんどない。

しかし、それとは対照的に庭木が見事であり、きちんと手入れが行き届いている。イヌマキ(コウヤマキ)やナギノキは樹齢数百年と思われ、キンモクセイ、ヒイラギモクセイ、モッコク、モチノキ、モミジ、ツツジなどが配置されている。遠景には、堂々とした杉が並び、上島古墳のある尾根に連なる。

なお要石及び陰陽石は、旅伏山を構成する牛切層の砂岩である。

作庭年代は不明だが、木佐本陣記念館のような出雲流庭園ができるまでの古い様式を表すものとして大変貴重である。



写真-13 出雲市国富町の要石



写真-14 斜面情報から見た庭の全景



写真-15 斜面にある陰陽石と灯ろう
他に目立った飛石や石造物がない

4. まとめ

庭自体の鑑賞も大変有意義だったが、そのときに伺った今までの歴史や経緯を大変興味深く聞かせていただいた。庭の特徴は、そのような歴史的・地理的背景と密接な関係がある。

このたびの視察で感じた点を以下に箇条書きに示し、図-1にまとめる。

1. 出雲流庭園の石材は花崗岩を基調としながら、その土地に分布する岩石を効果的に使用している。
2. たとえば、松江市八雲町では波多層デイサイトや鳥屋郷変成岩、出雲平野の北部では島根半島海岸部の泥岩、砂岩(牛切層)、流紋岩(成相寺層)などが見られる。
3. お話を伺うと、単に作庭の様子だけでなく、御先祖が家を興しそれを代々伝えてこられた経緯がわかって感慨深い。
4. お屋敷や庭の建設は戦争や災害などの障害がなく、平和で豊かな時代に隆盛となる。
5. 大きく分けると、江戸時代中～後期の新田開発の時期、明治中期～大正時代のデモクラシー・モダンの時代、昭和の高度経済成長期に多く作庭されている。
6. 代々続いたお屋敷であっても、何かの形で移転や移住をされている。その理由の多くは藩や国の公共事業である。
7. 庭園のことに限らないが、斐川町で昔のことを訪ねると、多かれ少なかれ太平洋戦争の話が出てくることが多い。島根県の他市町村では珍しいことではないか。

5. 参考文献

- 鹿野和彦・山内靖喜・松浦浩久・豊遙秋(1994)：松江地域の地質，地域地質研究報告(5万分の1地質図福)，地質調査所，15，103-105.
- 石塚尊俊(2004)：出雲平野とその周辺，ワンライン，176-181，199-246.
- 美多実(1966)：「出雲」をなぜ「シュットウ」と読むか，斐川町誌調査報告第2集，斐川町教育委員会，22-25.
- 池橋達雄(2004)：莊原歴史物語，莊原公民館，241-254.
- 陰山慶一(1996)：いま甦る山陰海軍航空隊「大社基地」，(株)島根日日新聞社，188-199.
- 榎原吉則・岡実智子(2012)：川の中の飛行場(増補改訂版)，148-149.
- 灘分郷土誌編集委員会(1991)：灘分郷土誌，平田市灘分公民館，177-298.
- 日本地質学会：<http://www.geosociety.jp/faq/content0152.html>
- 木綿街道振興会：<http://momen-kaidou.jp/history/>
- 岡 義重(1976)：郷土斐川物語，斐川町有線放送電話協会，134-144.
- 長瀬定市(1950)：斐伊川史，出雲郷土誌刊行会，82-84.

図-1 庭園を取り巻く地理的・歴史的背景

電子国土webの地理院地図を基に長瀬(1950)、石塚(2004)から加筆

